



ITCの鉄塔を背に筆者近影

ラ・テ三局を巡る道のり

私の放送人生

第16回
元石川テレビ放送 (ITC)
長瀬 元男侯氏

大学での研究分野

昭和29年、私は武蔵工業大学工学部電気通信工学科(現・東京都立大学)へ入学した。大学では「電波の異常伝播の解明」に取り組んだ。卒論は「VHF電波のナイフエッジ・エフェクトについて」と題して、ある民間の会社の協力を得て、広く電界強度の測定を行った結果を分析・検討し、合格点を得た。このときの経験は、後で述べる石川テレビでのUHF電波の異常伝播の発生や、外国電波との混信問題の発生時、学問的な見地から意見具申するのに役立った。

ラジオ放送局へ就職

大学の4年次、校内の掲示場には各企業からの求人が掲示される。もちろん私は「放送業以外は受験しない」と決めていた。東京では、NHKとNTVがテレビを放送中で、後発のTBSテレビは開局したばかりであった。当時、ラジオ局が各県ごとに免許されており、媒体の主力を担っていた。

その中から私は、郷里の名古屋に近く、将来テレビへ進出する可能性を秘めた三重県津市の近畿東海放送を選択し、就職した。



近畿東海放送が入っていた三重会館



ラジオ三重のベリ・カード

三重県津市へ、次いで名古屋へ転勤命令

当時の新入社員は、まず「社員

試用期間」で3カ月。この期間が過ぎると「準社員」になる。準社員になつて間もなく専務から呼び出しがかかり、そこで内示を受けたのは「当社は今回、名古屋でテレビ局を作ることとなつたので、君には、名古屋へ行ってもらうことにした」という通告だった。自分の思惑があまりにも早く実現し、戸惑いを隠せない3カ月であった。

名古屋での開局作業

とりあえず名古屋の現地へ行って見たが、ただの野原、空き家が一軒ポツンと立っていた。こんなところに本当にテレビ局ができるのだろうか？ 探し当てた仮事務所であったのは、東海テレビ放送株式会社という会社名と、放送開始が昭和33(1958)年12月25日と既に決まっていたことだった。あと半年しかない。

一方、準備に携わる人間はどうか。我々新卒者のほか、NHK、映画関係からの経験者など、まさに寄せ集めの武者揃いであった。私は砦のNHK放送技術研究所で

テレビ放送のノウハウ研修というテーマを貰い、3カ月前にたたんだばかりの東京の下宿へ逆戻り、1カ月間、テレビ局運用ノウハウを学んだのであった。研修を終えて名古屋へ帰り、目にしたものは、鉄筋コンクリート造り、地下1階・地上3階の建築現場だった。時間の流れは早く、すぐに開局の日は来た。

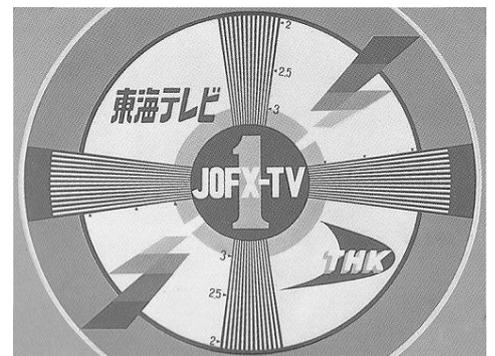


開局当時の東海テレビ社屋

全て生放送!

やがてVTRが出現する

開局当日は午前中に愛知文化講堂にて開局記念式典が催され、生放送で華々しく本放送を開始した。



東海テレビ開局時のテストパターン

当時のテレビ放送は、午前6時に始まり、お昼過ぎに短い放送の休止をはさんで、午後11時頃に終了していた。放送が終了した後は、もっぱら機械の保守点検の時間。技術現場はほぼ徹夜作業になる。そのため、勤務の形態も当初から3交代24時間勤務の形をとっていた。土曜日は半休どころか1週6日フルタイムの勤務が当然の時代であった。

昭和33年頃、日本の放送局にはテレビ番組を録画・再生する機械(VTR)が普及していなく、全てが生放送だった。1時間のドラマもスタジオから生放送していた。その問題に風穴を開けたのが、米

国アンペックス社製のビデオテープ・レコーダーの出現であった。

放送事故を起こして

表彰される不思議

ある日のこと。夜勤だった私は、放送進行表を確認の上、ある番組のビデオテープをVTRにセットし、放送開始を待っていた。放送30秒前のスタートの合図でテープはスタートしたが、映像が安定しない。慌ててVTR機器の不調箇所を調査するのだが、時間は無為に過ぎてゆくばかり。致し方なく、マスター室の進行担当へ、予備機へ交換すると伝え、テープを予備の機械へかけ変えて放送を再開した。しかし、時間はもはや5分以上が経過しており、当番組は途中切れの不体裁な結果になってしまった。始末書もの大放送事故である。

私は、当夜の送出責任者へ私の意見として、今夜、放送終了後に事故を起こした当該番組を再放送するよう提案し、深夜に再放送を実施した。

翌朝、勤務を終えた私は、昨夜の放送事故の顛末を上司へ報告、お詫びをしたが、家庭で視聴していた担当役員から、「事故が起きたのは残念だったが、事後処理の方法は完璧だった」とのお褒めの言葉だけでなく、表彰状まで頂戴することになったのである。

真夜中の感電事故

これもVTRが絡んだ問題である。私は、ある晩VTR機器での放送予定が完了したことを確認して保守作業に入った。一人勤務で誰もいないVTR室での出来事だ。メーカーからの作業手順に従って進めたが、なかなかうまくいかない。

狭い部分の部品に指を伸ばしたそのとき、隣を走っている裸の銅線に指が触れたらしい。ガッ！ン！ブルブル！感電だ！今までに感電は何度か経験し、その恐ろしさは十分理解し、注意も払っていたのだが、この保守作業は今夜が初めてだった。早く指を離して感電を止めなければ…、手を

引こうにも動かない。離さなきゃ
：と思っても、離れてくれない。
何度も手を引つ張ろうとするが、
離れてくれない。

このままでは意識も失ってしま
うのではないかと思った時、一つの
ことが私の脳裏を走った。それは、
アマチュア無線仲間と感電事故に
ついて無線で話し合った時のこと
だ。彼の語った言葉「感電して手
が動かなくなっても下半身は動く。
万一の場合を考えて、常に足は
自由にしておくべきだ」。

瞬間、私は両足で何かを力いっ
ぱい蹴ったのだろう、椅子ごと後
ろにひっくり返って初めて感電か
ら逃れることができたのである。

2インチ・ビデオテープの

カット編集

当時のVTRを語るにあたって、
避けては通れないことがもう一つ
ある。それは、あの幅広いテープ
(幅2インチ)を特殊な道具を使っ
て切り・繋ぎながら行う編集作
業のことだ。

切ったテープを特製のスプライ
シング・テープを使って繋いでいく



当時の2インチ・テープ

超物理的な作業ではあるが、編
集の成功率に問題があった。編集
点を決めるダイレクターの要求に
忠実に応えようとすればするだ
け、失敗が許されないという大き
なプレッシャーとなって跳ね返っ
てくる。

私は大事な場面でこの編集を
何度も担当したが、編集技術者
の知恵として、ダイレクターが指
示した編集点より、最低30分
1秒だけ余裕をもってテープをカ
ットしておき、万一編集に失敗し
ても、もう一度だけやり直すこ
とができるよう万全を期して作
業をしていたことを思い出す。

自作のステブレ自動送出装置

開局当初、40秒だったステブレ
枠は、すぐに45秒、1分と拡大
されていく。時間枠が拡大される
と操作も複雑になり、人間の能
力の限界へ近づいてくる。引き続
き、営業からの要請は複雑化の
一途を辿るばかり。その結果、操
作ミスも増える。そのため窮余の
一策として、コンピュータによる自
動操作の時代がくるまで、ステブ
レ枠に限って自動化する装置を
自作することとした。設計図な
ど書かなくてもコンセプトさえし
っかり持っていれば、ものを作るこ
とは可能だ。私は今までの経験を
基にして「ステブレ自動切り替え
装置」の自作に取りかかった。自
作に要した期間の記録はないが、
手作りの機器によって複雑なステ
ブレを自動送出したという記録
が残っている。

昭和44(1969)年春

北陸金沢へ転勤命令

この年、全国のテレビ局を巡る
大きな動きがあった。それは、各

県庁所在地へUHF帯を使用する
テレビ放送の親局を免許し、民間
放送のサービスを拡大・充実する
という郵政省の方針決定であった。
フジテレビ系列としても、系列局
を各地に展開できる大きなチャン
スだった。特に北陸三県(富山、石
川、福井)は3局全てフジテレビ系
列局として免許が与えられ、北
陸に最も近い既設の系列局であ
る名古屋の東海テレビが、新規開
局を全面的に応援することとな
った。昭和44(1969)年の初夏、
30名を超す社員が北陸3県の3
都市(富山、金沢、福井)へ出向し
た。私は石川担当の一員として、
金沢へ向かうこととなったのであ
る。

金沢での開局準備と開局その後

当時、金沢ではNHKのほか、
民放1局(北陸放送)がラ・テの免
許を得て放送中だった。我々の開
局準備の仮事務所は、旧富士銀
行金沢支店の3階にあった。一方、
新社屋の予定地は日本海に近い
観音堂町。周りは一面の田んぼ。

建築予定地だけが黒い地面を見せていた。



仮事務所の看板 (8mmフィルムから)



建設中の石川テレビ社屋 (8mmフィルムから)

昭和40年代の前半、このころの放送設備は第一次の自動化が普及しており、放送現場での操作もいわば「半自動化システム」が実用化されていた。石川テレビが導入したのは、T社製の制御用コンピュータ。アプリは組み込み、ソフトのバックアップはパンチテープで納

品されていた。10年前、すべての操作を人間の手だけで行った東海テレビの開局時に比べると、半自動とはいえ、コンピュータの稼働効果は絶大であった。



社屋の完成模型(8mmフィルムから)



現在の石川テレビ社屋

UHF電波のハンディキャップ
このとき、石川テレビへ免許された波はUHFであった。Uの電波は、Vに比べて「飛びが悪い」と言われてきたが、それは計算上のこと。法令上では同等化が行われて



左:円管鉄柱プレート、右:送信空中線プレート。いずれも昭和43年、11月と12月に竣工

それよりもUの媒体が決定的なハンディキャップを負ったのは、受像機にコンバーターを付加する必要があったことだ。また、「飛びの悪い」(?)はずのUHF電波が混信の障害を受けるなど、理解し難い問題も発生したが、これは、私の大学の卒論に関連した問題でもあり、解決は早かった。

ゴールデンタイムの大放送事故

放送中のテレビ番組が突然中断、「しばらくお待ちを…」のテロップに変わった。ゴールデンタイムの真つ只中だった。当時は機器故障の発生頻度も高く、短時間の番組中断は日常茶飯事だった。しかし、5分・10分と経過しても回復しない。これはただ事ではない。

状況を察知した私は、夜の街を電電公社の端局へと飛んだ。端局でも大騒ぎになっていた。原因は、端局と当社の演奏所を結んでいた地中のケーブルを、工事現場のブルドーザが誤って切断したためと判明した。緊急対応として、端局と当社演奏所との間に臨時

のマイクロ回線を設置することを決め、即刻作業に取り掛かった。

私は、専用電話回線を一本確保し、そこから石川テレビの現場部門の社員全員へ真夜中の緊急呼び出しを行う一方、社内の編成・営業部門や会社上層部へも現状の報告を行いながら、返す手で、自社のマイクロ回線の設置作業を援助した。端局からの映像が本社で受信できるようになったのは、東の空が白み始める頃であった。



開局当時の鉄塔
(8mmフィルムから)

ローカル放送局の自主制作番組

報道と名が付けば全国ニュースになる可能性があり、体制を整えていたが、その割を食ったのは一般の制作番組だった。そんな中でも「何とかして、自主制作番組を作ろう」という声現場から上が

った。機材も人も時間もない中で侃々諤々。結論はこうだった。放送現場を見渡すと、番組制作を担当する部署の他に、送出を担当するグループがあった。彼らは毎日コンピュータのご機嫌を伺いながら、正確な放送実施に執念を燃やしてはいるものの、単純作業の繰り返し。メンタルな刺激を望んでいた状況が番組立ち上げの機運と一致して、放送技術局放送部の部長が作る自主制作番組『タウン情報』がスタートした。どの部署が作ろうと、放送すれば「石川テレビ」だ。私は当時、放送送出の責任者だったが、この番組を制作するメンバーの一員に加わった。

電波の媒体力に驚く

ある週の『タウン情報』の放送が終わった時だ。スポンサーの事務所の電話が鳴り止まないという。当夜の担当Y君は、日頃から市内を回って取材していたが、ある家具スポンサーの倉庫に昨年のセールで売れ残ったサマーベッドが

300個近く眠っていることを知ったと言う。彼はいつもの通り、この商品を3分枠で紹介したらどんな反応があるか、それを知りたくて店長と交渉、黑白写真で撮影し、それに自局アナのナレーションをつけて放送したのだった。不良在庫を一掃したいとの店長の思惑もあつて価格が設定されていたとしても、翌朝を待たずして300個もの在庫を消してしまうテレビの媒体力に驚いたのは、店長は勿論のこと、番組担当者も、私たち社内の人間までもが新たな驚きを禁じ得なかった。「テレシヨップ」などという言葉もなかったころの思い出である。

賞を取れ!

開局から数年、各現場では事故なく放送を実施することだけで手いっぱい。これを社外から見れば、まさに「団栗の背比べ」。それに気づいていたのかどうか、いつからともなく社長の訓示の中に「賞を取れ」という一言が欠かさず挿入されるようになる。放送

技術の現場では、手作り上手なアイディアマンを募って、放送に関する「こんなもの、あつたらいいな」を始めた。

その中には、実用新案を申請するほどのものも出てくるようになったが、毎年、連盟賞の技術部門に応募はするものの、ホゾをかむ年が続いた。

そんな中、昭和63(1988)年、社長が急逝された年のことだ。日本民間放送連盟から、連盟賞技術部門への入賞が決まったとの一報があった。部内きつてのアイディアマンK君の作品に、花が開いたのだった。



名古屋での民放大会で表彰を受けた



昭和63年 連盟賞技術部門
優秀賞の盾

民放大会が開かれたのは奇しくも名古屋。亡き社長のご自宅も名古屋にあり、奥様はご健在と伺い、私は民放大会の壇上で表彰されたその足で、賞状と盾を持参の上、社長の霊前へ受賞の報告に参上したのであった。

全社EDPS化へのアプローチ

或る日、会社のトップも同席する会合の席上、私はある意見を具申した。この先コマースルを巡るスポンサーからの要望や操作の高密度化などへ、人手の対応だけでは賅いきれぬ状況が考えられること、また、放送現場以外にも解決すべき問題点が多々あるとして「電子計算機によるシステム化」に着手すべきであると申し述べた。当時、社のトップは新聞業界で

も重鎮。私の現場からの具申に、即決で全社的な実施を前提とした委員会の立ち上げを指示してくれた。私は、総務・経理・編成・営業・放送に、放送後まで含めたトータルシステム構想の答申書を作成、全委員の署名捺印を貰って提出した。受け取った社長は、文書全体に目を通してくれたかどうか知る由もないが、文書作りは大変だっただろうと、社長賞と金一封を頂戴した。

その後、どれほどの時間が過ぎただろうか、答申書のことなどすっかり忘れていたある日、社長から嘗ての答申書の内容と現状とを照らし合わせた上、再答申せよとお達しがあった。幸いなことに、無駄に過ぎたと思っていたこの時期にも、コンピュータ業界は日進月歩の進展があり、国産の機器も大きく進歩していたのだ。早速、この間に変化した要点をまとめて、第二次答申書として提出し、今回は即実行の指示を貰った。

能登線脱線転覆事故の 現地中継スクープ

昭和60(1985)年7月11日、能登半島を走る当時の国鉄・能登線で、急行列車が脱線転覆の一報が入った。

能登線は半島のほぼ中央部の穴水町から、半島の先端・珠洲市蛸島までの61kmを結ぶ典型的なローカル線である。事故の現場は、地図で見ると限り半島の南側、富山湾を望む狭い田んぼの中のような。中継班では、現場からの生中継が必至とみて、事故現場の再確認と、マイクロ中継のルート選定に入った。

能登半島は、なだらかな丘陵地を囲んで内浦と外浦に集落が点在し、道路事情が極めて悪い場所である。中継車はまず穴水を目指して出発させたが、問題は現地での映像を自社演奏所まで運ぶマイクロ回線の設営にある。日ごろの訓練から、マイクロ中継の想定にも概略のデータは収集していた。

しかし、今回事故が発生した

半島の南面低地では周りに高地が見当たらず、適当な中継場所を決定できない。だが、開局から15年が経過し、百戦錬磨のテクニカル・ディレクターG君は、一つの秘策を考えていた。彼は「事故現場が富山湾に向かって開けているらしい」という情報を得て、能登半島内の地点調査を続ける一方、念のため、マイクロ送受信機一式を積載したワゴン車を、隣県である富山県朝日町にある電電公社朝日無線中継所へ向かわせていたのだ。県内に中継点が決まらない場合、石川県の事故現場から富山湾の海越しに、隣県の電電公社マイクロ中継所へ直接割り込もうという算段だった。

その秘策が見事に的中した。中継車が道を選びながら事故現場へ到着するころ、朝日中継所では、マイクロウエーブ受信機の大型パラボラアンテナを能登半島の事故現場へ向けて、ナマ映像が送られてくるのを今や遅しと待ち構えていた。

私と能登

約半世紀前、名古屋から金沢へ転勤が決まった時、時の上司から、はなむけの言葉とともに、次のようなアドバイスを頂戴した。

「現地の仕事が一段落したら、ぜひとも能登半島各地を回って、伝統の祭りを見てほしい。自分もかなりの祭りを拝観したが、まだまだ多くを見足りない」

公・私合わせて能登を旅する機会も多く、勧められて祭りを拝観するうち、嘗ての上司の言葉の真意が理解できるようになった。そして、いつの間にか、同じ祭りを数年にも亘って追いかける病膏盲(やまいこうこう)の境地に入っている。

また、能登には故郷へ帰った時に味わうあの安堵感がある。言い古された表現だが、生まれ故郷を離れた私が選ぶ「第二のふるさと」に、能登半島の風景を選び得る幸せを感じている。

その後の能登半島

こともあろうに今年の元旦。

能登半島で大地震が発生した。

大きな揺れ、破壊、津波、火災、山崩れなど、地震が持つすべての武器を揃えて襲って来た恐ろしい時間であった。発災から約1カ月、親友の住む穴水の家を見舞ったが、全壊を示す赤いラベルが貼られているのみ。周りの景色からは、幼い時に見た、空襲によつて破壊された名古屋の街の再来を感じた。

帰途、車中から、大きく崩れた山肌、不気味に口を開いた地割れ、2m以上もせり上がり、干上がった海底などを目の当たりにして、運命の悪戯に遭遇した人たちが今後どのような行動をとるのだろうか、私が「第二のふるさと」と決めた能登半島の未来はどうなるのだろうか、暗澹たる気持ちになった。

だが、乱れに乱れた地上から目を転じると、泰然とした能登半島の丘陵があり、風にそよぐ若葉があった。この大地震が自然の起こした悪戯ならば、傷ついた能登半島を回復させるのも、また自然の治癒力ではないのか。自然

の力に人知が加わって、何年か先、美しく回帰した能登半島の姿を希求した。

大なるの 爪痕にはや 洲浜草 卓水



長瀬 元男侯 略歴

(ながせ・もとひこ)

昭和10(1935)年6月 愛知県出身

昭和33(1958)年3月

武蔵工業大学(現 東京都市大学)工学部 電気通信工学科卒業

同年4月

近畿東海放送(株)入社

同年6月

東海テレビ放送(株)へ出向

昭和43(1968)年10月

石川テレビ放送(株)へ出向

昭和47(1972)年2月

制作技術局放送運行部長

昭和52(1977)年6月

放送技術局放送部長

兼電子計算課長

昭和56(1981)年7月

放送技術局次長兼放送部長

兼電子計算課長

昭和60(1985)年6月

放送技術局長

平成3(1991)年1月

企画調査室長

平成7(1995)年6月

金沢ケーブルテレビ放送(株) 常務取締役就任

平成11(1999)年6月

同社 退任

石川テレビ企業(株)代表取締役社長就任

平成13(2001)年6月

同社 退任

平成19(2007)年

令和2(2020)年

理事長、副理事長、副会長など民放クラブ・石川の役員を歴任